

関係各位

福岡県米・麦・大豆づくり推進協議会
(事務局：JA全農ふくれん 営農総合課)

営農情報 2

大豆収量の安定多収に向けて「適期・適正播種」を

大豆で高収量を確保するためには、「適期・適正播種」を行うことが重要です。7月上旬以降は晴れが続く予報となっており、乾燥による生育障害や播き遅れによる収量低下が心配されます。

今年度については、作付面積の減少が見込まれることから、契約数量確保のため、より一層収量確保に向けた取組が重要となります。

事前に準備を行い、適度な土壌条件になったら速やかに播き始め、播種適期の7月20日までは播種が完了できるように作業計画を立てましょう。

また、播種時期に応じて播種量(株間)を調整するとともに、土壌水分に応じた播種深度になるよう適正播種に努めましょう。

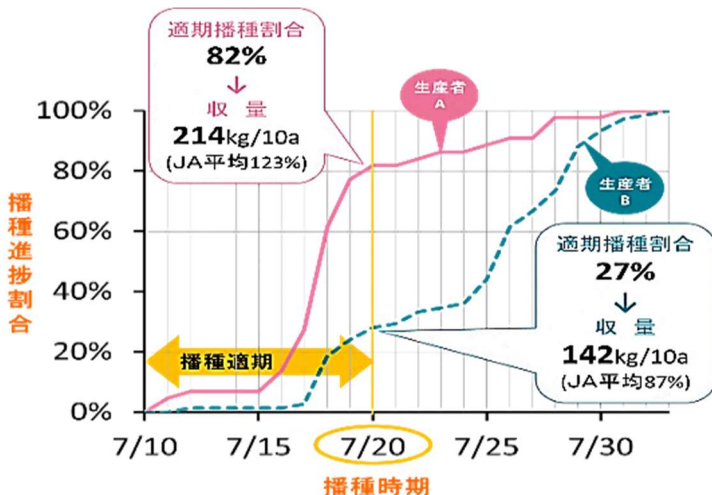


図 適期播種による収量安定

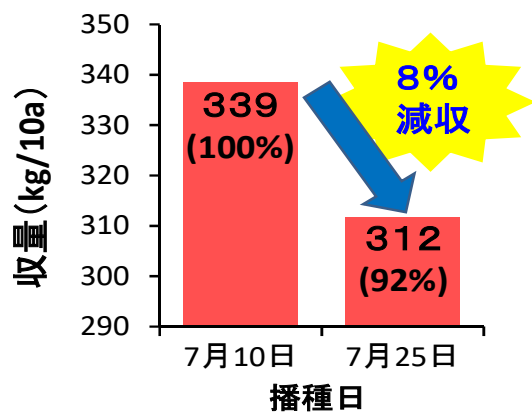


図 播種日による収量の違い (10年平均)
(農林業総合試験場)

適期に播種を完了するために

- ① 播種近くまで耕起しない。但し、残存雑草対策に留意する。
- ② 適度な土壌条件となったら、速やかに播く。
- ③ 二工程播種の耕起～播種は、時間を置かず「組作業」で行う。
- ④ 部分浅耕等の一工程播種を活用する。

大豆栽培の留意事項

1) 湿害および乾燥害対策

- ・ 周囲溝、弾丸暗きよは早めに施工する。
- ・ 周囲溝や明きよは確実に排水口に接続するよう施工する。
- ・ 出芽を確認したら、暗きよを閉じて乾燥害を回避する。
(梅雨明け後は乾燥状態となる場合が多いため、暗きよ栓を閉め水分を保持)



(2) 土づくり対策

- 大豆作付頻度が高まるほど、地力低下や土壌が硬くなる傾向があるため、「麦わらすき込み」や堆肥投入で地力低下を緩和する。
- やわらかい土づくりにより根粒菌の活性が高まり、大豆の生育も良好になる。

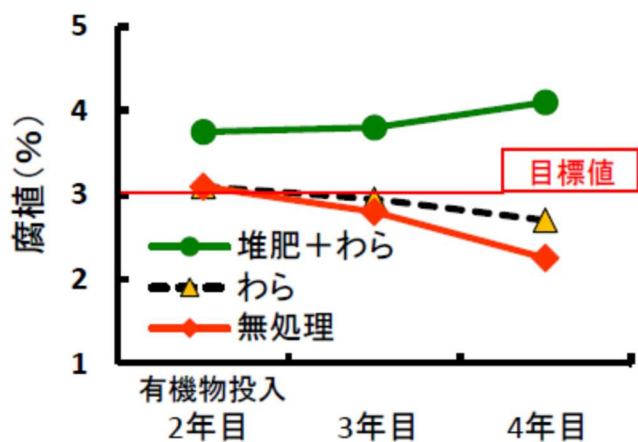


図 有機物の毎年投入による腐植の変化
(福岡県農林業総合試験場)

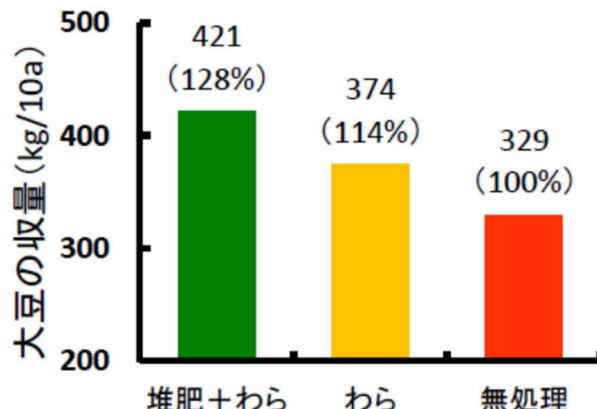


図 施用した有機物の違いによる大豆の収量差
※大豆-麦連作ほ場に5年連続で施用した場合
(福岡県農林業総合試験場)

(3) 種子消毒の励行

- 栽培暦の薬剤を参考にして必ず実施する（紫斑病対策、出芽時の腐敗防止）。

(4) 播種のポイント

- 梅雨時期の播種は、うね立て播種を基本とする。
- 播種時期が遅くなるほど、株間を狭く播種量を増やし、出芽本数を確保する。
(播種量の調整は必ず実施する。)

播種時期	7月1～10日	7月11～20日	7月21～31日
10a当たりの播種量 (kg)	3～4	4～6	8
条間 (cm) × 株間 (cm)	70 × 20～25	70 × 15～20	70 × 10～15

- 土壌の水分条件や播種後の天気予報に応じて、播種の深さ、鎮圧を調整する。

基準	土壌が乾いている場合 (梅雨明け後等、しばらく降雨がない天気予報)
3cm	基準よりやや深め(5～6cm) + 鎮圧 (麦用の鎮圧ローラー活用)

(5) 雑草対策の徹底

- 土壌処理除草剤は「播種後～大豆出芽前」に必ず散布する。
- 雑草が多いほ場は、播種前に非選択性の茎葉処理除草剤を散布する（特に周辺作物には注意）。
- 播種が早いほ場は、雑草の発生時期も早いため、除草時期に注意する。